

## 〔研究ノート〕

## 雪村の奇思(3) —『本朝画史』の雪村観(その3) —

『本朝画史』にある狩野山雪の雪村画についての批評は、中国の画論、画史の言葉をかりて表わされたものですが、簡単な文章のうち、雪村画の本質を正確に指摘していると思われる。これは今までの雪村画の批評のうち、おそらく最もすぐれたものの一つでありましょう。前回にひきつづき、その批評を読むことにします。

潑墨は雅淡。務めて華藻を去り、大低略して、新意を出だす。「潑墨は雅淡」。潑墨(画)は品よきさっぱりしている。潑墨とは墨汁を一時に潑(そそ)ぎひろげ、あるいは墨汁を潑(は)ね散らして物象を表わす水墨画の描法のことです。この潑墨は盛唐ごろにおこり、専ら山水画に用いられました。これを得意とした画家に風顛酒狂といわれた中唐の王墨(王黙と同一人か)がおります。

九世紀半ば、唐の張彦遠はその著『歴代名画記』の中で、「筆の蹤(あと)を見ないものは画といえない。山水画家の潑墨も同様である」(論画体工用撮写)という意味のことをいっています。中国画の正統的な作画法は対象の骨格を表わすため、その輪郭を謹密な筆線を用いて描出することですが、この狂逸な潑墨はそのような画の本道から逸脱しているわけです。このような伝統にそむいた画は「逸品画」と呼ばれました。

さて、『本朝画史』にいう雪村の潑墨画は挿図に示したような山水画であると思われます。この画は明確な輪郭線をもたないで、全体に淡い調子の中に、岩上の木立や岩傍の家屋が濃墨の擦筆で描かれています。そして、月夜に浮びあがる遠山のすがたは、筆をあたかも刷毛のように用いて、中墨、淡墨でもって描き、奥行きを微妙に表わしています。用筆は軟く爽かです。「雅淡」とはこのような画趣を意味していると思われます。な

お、「雅淡」は『図絵宝鑑』の李符伝にある「丹青雅淡」からとられたものでしょう。

この雪村の潑墨山水には、文献が伝えるところの唐代の潑墨山水の放縦な激しさはありません。だが、その流れにあることは確かです。簡疎な景物、軽い筆墨、広い余白をのこす画面構成など、実に計画的です。そこに、しっとりした詩情すら感じさせます。

雪村は潑墨山水を南宋の画僧玉澗から学んでいます。事実、「軸玉澗八景之図雪村老翁筆」と款する「瀟湘八景図巻」(正木美術館蔵)は彼が玉澗を師倣したことを示しています。玉澗様を学んだ画家に、愚溪、墨斎、雪舟、是庵などがおりますが、雪村ほど本格的に取組み自己の画風にした画家は外にありません。雪村の潑墨は中期の作品から現われます。(林 進)

雪村筆潑墨山水図(部分)

